

## 平成 29 年度依存症地域生活支援部会における家族支援に関する意見について

## (1) 家族の現状について

- ・ 家族には、「家族のしんどさ」を「わかってもらえなかったしんどさ」がある。
- ・ 相談電話をかけると、名前や住所を聞かれて嫌な思いをしたり、冊子をポンと渡されてどうしたらよいのかわからなくなった人がいる。
- ・ 「どこに行ったらいいのかわからない」「どうしたらいいのかわからない」というのが家族にとってしんどい状況。
- ・ 頭の中に何か情報が残っているとどこかにつながっていくと思うが、思い出しても電話をかけるまでに時間がかかる。
- ・ 家族会に行き続けられるのは、その中のつながり、家族間のつながりがあるから。人と人とのつながり、自助グループを越えた人間同士のつながりでつながっている。
- ・ 家族は働いていることが多い。
- ・ アルコール依存症の人の中には、子ども時代に依存症の家族がいる家庭で育っている人が 3～4 割いると言われている。
- ・ 依存症の相談では、一番初めに窓口に来るのは家族。本人が登場するにはだいぶ時間がかかる。

## (2) 支援者に対して

- ・ 自助グループの家族に出会い、つながってもらいたい。
- ・ 支援する側は、家族の気持ちに寄り添って、話の聞き方など基本的なことを知っておいてほしい。
- ・ 当事者はギャンブルで多重債務に悩んでいるため、借金への対応が必要。ギャンブル依存症のことを知っている弁護士や司法書士に出会い、自助グループや医療をすすめてもらいたい。
- ・ 依存症ビジネスが増えた。一日 2 万円請求されたり、施設に入るのに月 20 万円かかると言われている人がいる。明らかに貧困ビジネスみたいな被害を受けている。そういう施設とつながっている自助グループ等から、多額の献金を要求されている家族もいる。そういうものに巻き込まれないような家族対応を行政や医療はしてほしい。このグループは大丈夫とか、一度、二度、見に行ってみて大丈夫かどうか確認してほしい。
- ・ 支援者には、自助グループにつながれば回復すると確信をもってもらえればと思う。
- ・ 自助グループなどに紹介して一回だけの電話で終わるのではなく、「どうでしたか」と聞けるといい。

## (3) 家族の支援体制について

## &lt;ミーティング会場について&gt;

- ・ ミーティング会場が遠方だと交通費もばかにならないので、ミーティングができる場所を確保してほしい。会場費も負担になる。
- ・ 病院や区役所など、お金がかからずミーティングが開けるような場所がたくさんあると良い。

#### <家族が相談につながるための取組について>

- ・相談につながるきっかけを多く作ってほしい。ポスターも冊子も目にとまるように、記憶に残るようなものであればと思う。パソコンやスマホが使えない人もいる。

#### <支援者の人材育成について>

- ・もっと保健所の職員への研修が必要。
- ・家族のスタイルも様々になってきている。セクシャルマイノリティの家族への対応も必要。家族会を紹介しても、家族は話せないと言われる。ゲイのパートナーからの電話を受けた人がとんでもない対応していることもある。LGBTのパートナーからの相談があったとき、どう受けるかという研修がいるのではないか。ヘテロセクシャルのパートナーと比べると、相談しにくく、ヘテロセクシャルのふりをして相談している。そういう背景を全面的に受け入れた上での相談対応でない意味がなく、そこを強化していく必要がある。

#### <その他>

- ・家族の相談は配偶者が大半だが、子どもを救うということに踏み込んでいかないと変わらない。
- ・虐待やDV等の問題と依存症関連問題がつながってほしい。依存症の相談支援センターを作って、地域単位できめ細やかな支援が届くネットワークが必要で、全体の見守りとスーパーバイズできる体制も必要。
- ・今までの家族支援にあてはまらない人も出てきている。DVが絡んでいるケースや、裁判を控えていて保釈中の人の家族への支援、そして、発達障がいや高次脳機能障がいなど、他の障がいがある人の家族への支援が必要。
- ・依存症の人への支援は家族支援から始まる。各保健所が窓口となって、家族相談を受け、家族支援のグループをつくる必要がある。専門職による援助と、自助グループの両輪があって、家族は回復する力をつける。また、専門職の仕事の一部を自助グループが担っているわけではない。自助グループの協力を得て、家族支援グループをやる必要がある。